

方式に一貫性がみられないこと、また、単に現象を記述するだけにとどまり、なぜそこに座るのかという説明はほとんどなされていないことが指摘された。座席行動をスペーシング行動の概念で説明する、という目標を再度提示した。

第3章 実験Ⅰ 従来の座席行動の研究においては教室空間をどのように分割すべきか、その根拠があまり明確ではなかった。本論文では座席の好みテストをおこなってこの問題を検討した。座席の示されている用紙を学生に配付し、各座席に対する学生の好みを報告させた。学生の回答を因子分析で検討すると、教室は4ゾーン（前・後・中央・左右両端）に分割されることがわかった。学生が実際にどのゾーンに着席するかを多重判別分析で調べたところ、好みテストの結果から実際の着席ゾーンを平均62.9%で予測できることがわかった。

第4章 実験Ⅱ 第3章で見い出された4ゾーンの意味が検討された。部屋に入っ
て、1) 50歳くらいの男性、2) 見知らぬ20歳くらいの女性、3) 仲良しの20歳くらいの女性 と話すとき、どの位置で話すかについて、部屋の平面図と話し相手の記された回答用紙に適切だと思う位置をマークする。前方ゾーン着席者に分類された学生は対人距離が小さいから今度の課題でも近くにマークし、後方ゾーン着席者に分類された学生は対人距離が大きいから今度の課題でも遠くにマークすることが期待された。この期待は話す相手が50歳くらいの男性の時にはあてはまったが、それ以外の人物の場合にははっきりしなかった。実験Ⅰで見い出された4ゾーン構造は教卓にいる人物が教師ないしそれに近い人物であるときにだけ成立することが考えられる。

第5章 実験Ⅲ 第4章では座席の前後の変動は説明されたが、左右の変動については説明できなかった。スペーシング行動の概念を拡大して新たに「スペーシングに関わる態度」という概念を導入し、個人特性と外部条件(教師や授業内容の魅力)の組み合わせで説明しようとした。個人の動機特性についてはEPPSを実施した。教師や授業内容に魅力がある場合とない場合について、自分はどの座席を選択するかについて、実験Ⅰで示された4つのゾーンのうちから「一番座りたいゾーン」から「一番座りたくないゾーン」まで順位をつけさせた。教卓に近い座席を望む学生ほど達成動機は高かったが、親和動機には一貫した傾向が認められなかった。左右両端ゾーンは達成動機が極端に低かった。このゾーンは高い追従動機と低い達成動機の組み合わせだった学生が選択すると解釈された。

第6章 これまでの成果の要約と本研究の意義について考察した。合理的根拠に基づいて教室を4ゾーンに分割し、各ゾーンの内容についてスペーシング行動の概念を用いて説明した。仮想的座席配置についての研究なので、この結果は現実の様々な教室にも適用で

きると期待される。

第7章 教室場面にとどまらず、更に一般的な場面での座席行動についてもあてはまるかもしれない。本研究では教室内の座席行動を中心に扱ったが、今後これを広く空間行動一般の研究の中に位置付けるための基本的枠組みについて論じた。

論文の要旨は以上の通りであるが、最後に北川は臨床場面での印象的な例を挙げて座席行動の意味を説明した。家庭内暴力児に悩む両親と父方の祖母の3人に面接した。父親と祖母は長椅子と一緒に座り、母親は一人離れて別の椅子に座った。家庭内で祖母と父親が一体化しており、母親1人が孤立している様子がはっきりと示された(春木、1987)。

論文審査結果の要旨

北川氏は対人意識が無意識の内にスペーシング行動(対人距離と対面角度の調整)として表現されることに着目し、まず数人の間の人間関係がテーブルにつく時の座席の位置に表現されることについて文献を整理して検討した。ついで、ここに示された現象が教室での教師と学生の人間関係においても、同様に座席位置においても示されることを予想し、以下の観察記録を行い、その結果について解釈している。

実験 I では、着席行動を検討する際、研究者により座席空間の配置の分割がまちまちであり、関連研究を比較しにくくしていることに北川氏は着目した。彼は各学生の座席を記録するとともに、各学生の一つ一つの座席への好みを報告させた。その結果に対して高度な統計的処理を行い、合理的な仕方では座席行動に関する4ゾーンの潜在的構造を見い出した。着眼点もよいし、それを展開するテクニックも優れたものである。従来の座席行動研究ではこれほど高度な議論を展開している例は見当たらない。

実験 II では従来の研究では現象記述だけで終わっていた教室における座席行動を学生の教師に対する「パーソナル・スペース」の概念で説明できるか、という問題をたてて検討した。単なる記述を超えて何らかの法則で説明しようとする試みは、この分野ではかつてなされたことがなく、大変ユニークである。授業に出てくる学生達にシーティング・チャートを配付して学生の着席行動を記録するとともに、シミュレーションによって測定された各学生のパーソナル・スペースの大きさを測定し、それによって当該学生の着席行動の説明を検証した。この方法論も妥当である。

実験 III は、実験 I で見い出された4ゾーンの内容について更に検討された。教卓にいるのが○○の特性をもつ人物だったら、彼の授業は面白くないが人柄が気に入っていたと

したら、自分はどこに座るだろうか。学生の教師に対する関係志向的態度(特に追従)や課題志向的態度(特に達成)が細かく分析されている。ところで、このような議論を行ううちに次第に論点が当初の「スペーシング行動の概念で座席行動を説明する」から「諸要因によってスペーシング行動を説明する」方向に移動してしまった。この力点の移動に対して、研究内容の一貫性が弱くなった、という批判があった。また、特に実験 III の結果は単に学生が状況を想像して答えるものであり、実際の学生の座席行動を記録したものではない。この部分はまだ概念的な水準にとどまっていた、実証にまで及んでいないことになるので、ややものたりない、という批判があった。

この欠点は本論文の欠点というよりもむしろ、この分野にはまだあまり踏み込んだ研究がこれまでなされたことがない、という研究事情を反映するものであろう。1つの分野全体についてはとても北川氏ひとりでカバーしきれものではない。しかし、北川氏のオリジナリティの高い研究によってこの分野の研究の基礎ができたので、今後はこの方式を用いてこの分野で本格的な研究が盛んに発表されていくことになるだろう。大学の教室での座席行動にとどまらず、展望の項で触れられていたように、今後は音楽会や政治的集会など、様々な集会場面で仮説の検証に努めてほしいところである。

その他、北川氏は座席とパーソナリティ特性の関係などについても論文を多数発表しており、大坊(1998)や澁谷(1983)などにも引用されている。そこでは教室運営にかかわる具体的な問題が扱われていて興味深いのが、学位論文で扱った問題とは観点が違ってくるので、今回は一切ふれなかった。

北川氏の業績の要点は、教室における学生の座席行動を、学生の教師に対する対人意識がスペーシング行動という仕方で調節されて表現されたものとして捉え、教室に4ゾーンの潜在構造を見出し、それぞれのゾーンの持つ意味について仮説を提示したところにある。このように教室空間の構造形成の機構にまで立ち入った研究はこれまでみられなかった新たな方向を示しており、今後の発展が大いに期待される。

審査員は学位授与について全員一致で賛成した。